



愛隣幼稚園.....

園だより

.....16. 6月号

共に生きることの始まり

今年の春から各クラスの担任が、その月の保育の願いや子どもたちと歌っている歌などを紹介するクラス便りを発行するようになりました。これまではこの園だよりの中で、各クラスの願いなどをお伝えしてきましたが、それをもっと身近に感じながら読んでもらえたら、子どもたちの園生活とお家の皆さんとの距離はぐんと近くなると考えてのことです。5月の願いには「自然や小さな生き物との出会い、発見、気づき」などが挙げられました。すると、子どもたちの興味や関心を共有してくださる大人たちが大勢現れて、私はちょっと嬉しくなりました。愛隣幼稚園の小さな庭で、子どもたちは実に様々な生き物や植物に出会っています。子どもたちの生活が地面に近いためでしょうか、大人には見えないものが本当によく見えるようです。「バッタをつかまえたよ！」と男の子からのお知らせ。バッタの現れる時期はもう少し雑草が伸びてくる頃だと思っていましたが、既にバッタの生活は始まっていると、子どもたちが教えてくれました。ばら組の遠足では小さな生き物を探すネイチャーゲームも楽しみました。その様子を見ていて感心しました。多くの子どもたちが「あり・どんぐり・だんごむし・くろーばー」をあつという間に見つけているのです。大人には簡単なお題ですが子どもにとってそれは“なかなか”な事です。まず、それがどんなものか知っていなければ見つけれられません。それがどんな所でどんな生活をしている物か、そんな情報もなければ困ってしまうでしょう。そんな中、日頃、園庭でしゃがみこんでいることが多い子どもたちの動きには無駄がありませんでした。どんぐりをあつという間に見つけ、その目でそのまま動く黒い点を追いありを確認。更にやや日陰の隅にだんごむし発見！次に陽の当たる緑の草が生えた場所へ移動し、ちょっとしゃがみこんだかと思ったらすぐに小さなくろーばーを手にしていました。小さな生き物に出会い、その生活の中に様々な発見をして心を動かされた人たちは、その生き物をもっと知りたいと思うようになります。一緒に生活してみたい（飼ってみたい）と思うようになり、好きになります。だんごむしを見つけてはひたすら集めるだけだった人が、小さな飼育ケースにだんごむしが生きていられる環境を用意しようとする人に変わっていくのです。共に生きる始まりがここにあるような気がします。

先日、こんなニュースがありました。『都会に現れたミツバチの群れ（約 1000 匹）がビルの壁を覆い、通報により駆けつけた警察官、消防隊員により駆除された』というニュースです。聞いた私は「えっ！駆除しちゃったの？」と驚きました。この時期のミツバチは分蜂という巣分かれを行います。新しい女王蜂が生まれると古い女王蜂は一部の働き蜂と共に巣を離れ、新しい巣を作るのです。この群れもきっとその移動の途中でした。放っておけばどこかにいなくなるはずでした。“蜂の群れ”というだけで人に危害を加えるという連想に繋がりが駆除されてしまいました。ミツバチはもともとおとなしい性格です。また、1 度刺すと死んでしまうので余程のことがなければ、人を刺すということはないそうです。さらに今、ミツバチは世界的にその数が減少しています。ミツバチは花の蜜を集めると同時に受粉という大事な仕事もしています。それで、このミツバチが減れば食物の生産にも影響が及ぶと危惧されているのです。・・・ですから、そんなこんなミツバチ情報を少しでも知っていたら、駆除せずに共に生きるという選択もあったのではないかと感じてしまったのです。蜂にすら私たちの生活は支えられているのです。共に生きているのです。

子どもたちの小さな生き物との出会いは『共に生きることの始まり』です。相手を知るということなしでは共に生きることは難しいのです。もちろんすべての命あるもののことを私たちが知ることは不可能です。でも、一つの出会いが、一つの命を尊重する経験に繋がれば、ここ地球に住む多くの命を尊重する思いに繋がっていくはず。人もたくさんの命の連鎖の中で生きていることに気づき、『共に生きる』方法を選択することができると思っています。